



ちはやぶる

かみよ

神代も聞かず

竜田川

唐紅に

水くくるとは

からくれなる

在原業平

ありわらのなりひら

Even in the ancient days
When the gods held sway this world,
I have never heard as I see it now
The Tatsuta River tie-dyed bright red by maple leaves.

「古の神々の時代でさえ、こんな不思議があったとは聞いたことがない。竜田川に錦のように、真っ赤な紅葉が舞い落ちてまるでこの川を、あざやかな唐紅の絞り染めにしてしまうとは。」

「絞り染め」は和服でよく見かける技法です。糸で布を絞るように括ってからその布を染めると、糸で括った部分が染まらずに残ります。

そうして立体感のある美しい模様にする、素晴らしい職人技です。「総絞りの着物」などは、とても手間のかかる高級品ですね。

真っ赤な紅葉が竜田川を染め上げていく、秋の燃えるような景色。

その様子を、業平は「まるで川そのものが絞り染めをしたようだ」と詠みました。百人一首で有名なこの歌は『古今和歌集』や『伊勢物語』にも登場します。

在原業平といえは「昔男ありけり」と謳われた平安時代のプレイボーイ。雅な色彩と耽美的な歌詠みの技術からも、彼の風流な男ぶりが偲ばれます。

古来、日本の宮廷文化では男性が女性を口説くのも「和歌」でした。

「男らしさ」が戦う力だけではなく、教養や美意識が重んじられたのも日本的ですね。男性の繊細な感情が、紅葉や桜などの自然に動かされる。とても素敵なお話です。

花鳥風月、雪月花。自然を愛する日本の言葉にもその伝統が感じられます。美しいものにある強さ、移りゆくものを愛する豊かさ、そして儚さにある覚悟。

「男らしさ」とお花の関係は、私たちが思っている以上に深いのかもしれません。

（古今和歌集 巻五 秋哥下二九四、伊勢物語 第一〇六段、小倉百人一首 一七番）

花物語

比田井宗玉

